

○書名：「多読術」（松岡正剛）2008 ちくまプリマー新書

○作者：松岡正剛（1944~2024）実業家、編集者、著述家 編集工学研究所所長

日本文化、芸術、生命哲学、システム工学など多方面に及ぶ思索を情報文化技術に応用する「編集工学」を確立。日本文化研究の第一人者として「日本という方法」を提唱し独自の日本論を展開（講談社現代新書から抜粋）

著書：「千夜千冊エディション」「日本文化の核心」「江戸問答」（田中優子と対談）

○紹介事由：「多読」をどうやるかの道筋が見えた。「読書が趣味」を再認識した。

○概要：著者の読書論と読書方法論を編集者からの問いに答えるという形でまとめたもの

○読書論

- ・本とは長い時間をかけて世界のすべてを呑み尽くしてきたメディア。全ての人間的なものの源泉は本の中にある。読書は多様なもの。読書とはどんな本をどんな読み方をしてもいい（スキルアップのため、食材を楽しむように、ファッションのように着替える）
- ・普段から活字や図像にふれていることが読書の基本
- ・読書の醍醐味は未知のパンドラの箱を開くこと。読書はわからないから読む。毒でもある。書物に対しリスペクトを持つ。三割五分の打率で上々。
- ・読書は編集である。自己編集かつ相互編集＝書いてあることと自分が感じるものが混じる。著者の「書く」行為と読者の「読む」行為は酷似している＝双方向的な相互コミュニケーション
- ・読書はナイーヴな行為、フラジャイル（こわれやすい）である＝「恋心は定まらない」微妙でどきまきする～読書は他者との交際⇒だから多読になる

○方法論（多読するための）

- ・目次読書法＝本の内容を想像する～その本を読む気になるかどうかの大事＝入口
- ・「マーキング読書法」＝本をノートとみなす、読みながらマーキングする～読むことに徹することができる、再読が容易。
- ・「本をマッピングする」＝年表、作表～頭の中の編集構造に入れていく
- ・「引用ノートを作る」＝気に入った箇所のセンテンスやフレーズをノートに書く
- ・多読術は多様性を楽しめるかが大事。ジャンルにこだわらず好きに色々な本に遊んでみる。自分で読書テイストを作る＝どういう「ながら読書」をするか
- ・江戸の私塾の読書法＝「掩巻」（えんかん）＝書物を少し読んだら。そこで一旦本を閉じてその内容を追想し、アタマの中ですぐにトレースをしていく方法。「慎独」（しんどく）＝読書した内容を独り占めしないで、必ず他人に提供する方法
- ・自分の好みを大切にすが、誰かに薦められた本は読むべきである
- ・複合読書法＝①類書や似たような本は一緒に読む②本から本へ③キープック（光を放っている1冊）を基に読み進む
- ・読書を続けるコツ＝さまざまな本の読書をまぜこぜにしながら遊びや息抜きを読書でしていく

<ご参考>

- 目次 第1章 多読・少読・広読・狭読
- 第2章 多様性を育てていく
- 第3章 読書の方法をさぐる
- 第4章 読書することは編集すること
- 第5章 自分に合った読書スタイル
- 第6章 キーブックを選ぶ
- 第7章 読書の未来